

備後地方における浄土真宗寺院の本堂平面構成 に関する基礎的研究

無漏田 芳信* 小村 治** 吉川 博司***

A Study on Planning and Elements of Hondo Floor Plan
in Jodo Shinshu Temples of Bingo Region

Yoshinobu MUROTA* Osamu KOMURA** Hiroshi KIKKAWA***

ABSTRACT

We investigated the details of development of the Hondo building plan of Jodo Shinshu temple throughout historical documents. Then, we surveyed the planning and elements of Hondo floor plan in the case of 53 branch temples of Bingo Region, and examined the remodeling of floor plan in the case of Hondo rebuilt or extended, the measurements evaluation of inner temple and the chief priest's request for Hondo in the case of 45 temples.

(1) The Doujo style had started to change the temple style after the operation of the low of katana hunting, and the installation of Gohai, a dais for a Buddhist image and so on had needed the permission of the head temple in those days. (2) Hondo floor plan is nearly the left-right symmetry and it composes of the inner temple, Yoma, the seating area, veranda and so on. The most of floor plans are 6 ken in the width of seating area and the most of inner temples are over 3 ken wide and 2 ken deep. (3) The rebuilding and extension tend to widen the depth of inner temple and to expand the seating area. The dimension of inner temple that chief priests didn't feel a cramped is clarified. Some chief priests have problems on a beauty of Hondo, a storing space, a barrier-free for the elderly visitors and so on.

キーワード：浄土真宗寺院，本堂平面，内陣形態，寸法評価，改善要望，備後地方

Keywords：temple of Jodo Shinshu Buddhism, Hondo floor plan, floor plan type of inner temple, evaluation of measurement, request of improvement, Bingo Region

1. はじめに

日本の伝統的な建築物の一つである寺院建築は、建築様式などの時代的な影響を受けながら各宗派によって様相が異なる平面形態が醸成されてきたと考えられる。しかし、寺院建築に関する文献では建築様式や伝統的工法に主眼が置かれた代表的な寺院の紹介などが多く、宗派別に一般末寺まで系統的に解説された建築計画資料は乏しいのが実状である。本堂平面は、天台宗や曹洞宗の宗派では勤行や修行をする場（内陣）として構成されている。一方、浄土真宗の場合には内陣のほかに門信徒に供する場（外陣）をもち、飛騨高山の真宗末寺ではつい最近まで本堂を使って集落の集會が行われていたという。

本研究は、これらの点に着目し、現代における寺院末

寺の本堂平面を建築計画的な立場から考究する第一歩として、内陣のほかに外陣をもつ浄土真宗寺院（ただし、現在は主に10派に分かれているので、備後地方に多い本願寺派（西本願寺）を対象）に注目した。すなわち、浄土真宗の末寺本堂が現在のような平面構成となった歴史的経緯を文献より理解した上で、備後地方における浄土真宗寺院を事例とし、本堂規模や平面構成などの現状を把握して末寺本堂の平面特性について考察した。また、旧本堂と現本堂の平面が比較可能な事例や増改築事例より、本堂平面の基本的な考え方、変更点を把握するとともに、内陣・外陣・余間に対する住職の各部寸法の評価および住職の本堂に対する要望を把握し、内陣・外陣平面の構成要素と本堂に関する現代的な課題を整理した。

* 建築学科

** 大学院工学研究科地域空間工学専攻

*** 現在 (株)大鉄工業

本研究では、備後地方の浄土真宗寺院に関する文献調査を行うとともに、備後地方南部の福山市、尾道市、府中市およびその周辺4郡の本願寺派寺院のうちRC造を除く木造寺院72カ寺を対象とし、本願寺派寺院の本堂平面の寸法採取や写真撮影を行い、53寺院から協力が得られた。また、寺暦、現本堂の建立時期、旧本堂平面の様子や増改築状況、使用上の問題点や改善要望などに関する調査票を用意した指示的面接方式により、住職を対象としたヒアリング調査も実施した（協力寺院45カ寺）。

2. 真宗道場の寺院化と備後地方の浄土真宗末寺

2.1 真宗道場と末寺の寺院化

浄土真宗の場合、宗祖親鸞上人は「道場をば、すこし人屋に差別あらせて小棟をあげてつくるべし」とし、民家を改造した惣道場や内道場で教えを説いたとされている。親鸞上人没後、子孫が大谷に親鸞上人の墓所である大谷廟堂を造ったが、1338年の再興の際に親鸞上人の影像と十字名号の本尊が安置されて廟堂の寺院化が始まり、1636年に現在の西本願寺御影堂が建立されている。

今日のような末寺の本堂形態は1400年ごろ飛騨高山で最初に出現したという話も聞かれるが、当時の末寺は主に図1に示すような道場形式であったと考えられる。真宗の教えを説く場であった惣道場や内道場が現在の本堂形式に変わった背景を、文-1～文-4などより検討すると、表1のようなことが指摘される。すなわち、秀吉の刀狩令による兵農分離を契機として地侍や村落の中心者が真宗坊主の道を選択して僧侶が急増し、村落の惣道場などが寺号の下附を受けて寺院化が始まっている。

寺号を公称した道場には、本山より宗祖御影のほか写真1に示す七高僧御影や太子御影などが下附され、それらを安置する内陣や余間が徐々に整備されていき、末寺が道場形式から本堂形式に変化してきたとみられる。その後、浄土真宗など各宗派において、寺院本末（本山と末寺の上下関係）の秩序の明確化が、江戸幕府の出した制度（1665年の『諸寺院法度』、1668年の『堂舎客殿作事之定』など）によって行われ、現在のような浄土真宗末寺の本堂形式が確立されていったと考えられよう。

これらによって本山と末寺の上下関係が明確にされ、本山が寺号・本尊・僧侶資格など寺院運営の基本部門に関して免許を与えていくようになる。本堂平面に影響を及ぼす要素を抽出すると、写真1のようなものが例示される。つまり、阿弥陀如来の仏像を安置する場合、須弥壇を出仏壇にする場合、厨子や客殿を取り付ける場合、内陣の丸柱や向拝を設ける場合などは本山の許可が必要とされている。したがって、図2に示す本山の御影堂のような平面形態を模範としながら、末寺は相応な冥加金を献納して本山から許可を受けて本堂に取り入れ、今日のような本堂平面に近づいていったものと理解される。

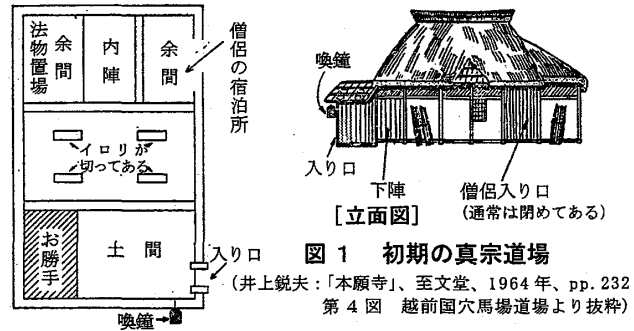


図1 初期の真宗道場

（井上鋭夫：「本願寺」、至文堂、1964年、pp. 232 第4図 越前国穴馬場道場より抜粋）

表1 浄土真宗寺院に関する動向と規制

	世間の動向	本願寺派の動向
1599年以前	1588 刀狩令(寺院・僧侶の急増)	1272 大谷廟堂の建立 1591 現在の位置に西本願寺が移転
1600年代	1615, 1624 宗門改 1661 宗門改が全国的に完了する 1632 各宗派本山に対し寺院本末帳の提出を求める 1665 諸寺院法度 1668 堂舎客殿作事之定 1692 各宗派本山に対し再度寺院本末帳の提出を求める	1624-1644 寺号を公称した寺院が増加する<『紫雲殿由縁記』>(寺号を公証した証明として、七高僧、聖徳太子の巻物と阿弥陀如来の仏像が本山より下付される) 1636 西本願寺が現在の形態(図2) 1668 須弥壇の設置が可能となる<『如寺法可致』>
1700年代	1722 諸宗共通の寺院法度	1713 須弥壇、向拝が設置可能となる 1721 厨子、宮殿、出仏壇、後門、丸柱、箱棟、釣鐘、喚鐘に関する規制<『御停止』>
1800年以降	明治 道場は寺号を称し末寺となり、道場はなくなる 戦後 本末制度がなくなり、本山、別院と末寺の3種のみとなる	

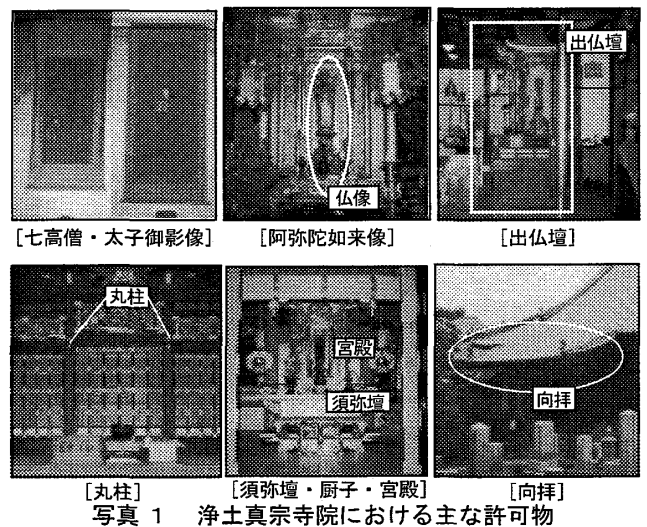


写真1 浄土真宗寺院における主な許可物

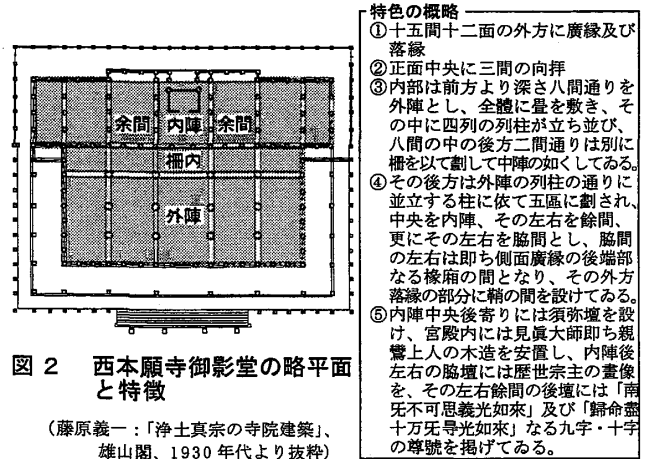


図2 西本願寺御影堂の略平面と特徴

（藤原義一：「浄土真宗の寺院建築」、雄山閣、1930年代より抜粋）

- 特色の概略
- ①十五間十二面の外方に廣縁及び落縁
 - ②正面中央に三間の向拝
 - ③内部は前方より深さ八間通りを外陣とし、全體に畳を敷き、その中に四列の列柱が立ち並び、八間の中の後方二間通りは別に櫓を以て劃して中陣の如くしてある。
 - ④その後方は外陣の列柱の通りに並立する柱に依て五區に劃され、中央を内陣、その左右を餘間、更にその左右を脇間とし、脇間の左右は即ち側面廣縁の後端部なる椽廂の間となり、その外方落縁の部分に箱の間を設けてある。
 - ⑤内陣中央後寄りには須弥壇を設け、宮殿内には見真大師即ち親鸞上人の木造を安置し、内陣後左右の脇間には歴世宗主の畫像を、その左右餘間の後壇には「南无不可思議光如来」及び「歸命盡十万无碍光如来」なる九字・十字の尊號を掲げてある。

2. 2 備後地方における浄土真宗末寺

備後地方などの西国における浄土真宗の布教活動は、主に仏光寺派によって行われている。文-2の「備後光照寺—西国真宗の根本道場—」によると、親鸞上人と師弟関係にあった明光良雲が鎌倉に建立した天台宗の最宝寺を1208年に真宗寺院とし、1216年に備後山南郷に真宗道場を開いている。その後、明光了円が1320年に山南郷に入り真宗の教えを布教し、1326年ごろには備後光照寺を創建している。その一方で、明光門弟の了源が1330年に寺基を洛東に移して仏光寺と命名したことから仏光寺派と呼ばれるようになっていく。そのため、備後光照寺も必然的に仏光寺派に属することになるが、山南およびその周辺では光照寺道場が次々と建てられている。しかし、1482年には仏光寺経豪が蓮如に帰服し、1496年ごろ光照寺も本願寺に帰参している。また、1507年には弟子の照林坊祐了が安芸に進出して布教活動を行っている。

このようなことから、山南郷では17世紀初めに天台宗から真宗に改宗した光照寺末寺も多く、備後の真宗寺院の核として光照寺の存在が特筆される。図3には、1816年に再建された備後光照寺の本堂平面を示した。この本堂平面は、後門形式の4間間口の内陣と3間間口の両余間に奥行2間の結界を挟んで8間間口の外陣からなる平面構成となっており、内陣・余間の周囲に後廊下が、外陣に広縁と落縁が回されていることがわかる。この光照寺の本堂規模や平面構成は、備後地方などの浄土真宗末寺の本堂平面に影響を及ぼしているものと推測される。

そこで、図4の備後地方3市4郡における木造の浄土真宗末寺72カ寺を対象とし、本堂略平面を採取した。調査概要は表2に示したが、協力が得られた53カ寺のうち3カ寺は他寺院と様相が異なる本堂平面をみせていることがわかった。この3カ寺の本堂平面の様子を図5に示したが、うち2例は民家（庵）を改造した寺院である。

EC寺は、昭和に入って寺号を取得しており、1965年に草葺き屋根にトタンが被せられている。本堂の後側に庫裏を増築しているが、惣道場的な平面構成をみせる例といえよう。AU寺は、大正末に寺号を取得しており、かつては村人が旅の僧に住と食を提供して供養などを依頼していた村の墓地内にある建物で、民家の出居に仏壇が設置された内道場のような平面構成の特徴をみせている。1967年の本堂再建では、浄土真宗寺院の平面に近づけるために両余間と向拝が新設されているが、敷地形状の関係から奥行の深い本堂平面となっている。この2カ寺はいずれも後門形式の内陣には至っていない。なお、1964年に建立されたDA寺は、出仏壇となっていない後門形式の内陣平面をもつ浄土真宗寺院の特例といえる。

したがって、以降の分析では、この3例を除いた50カ寺の調査資料をもとに、備後地方における浄土真宗寺院の本堂平面や構成要素について検討を行うこととする。

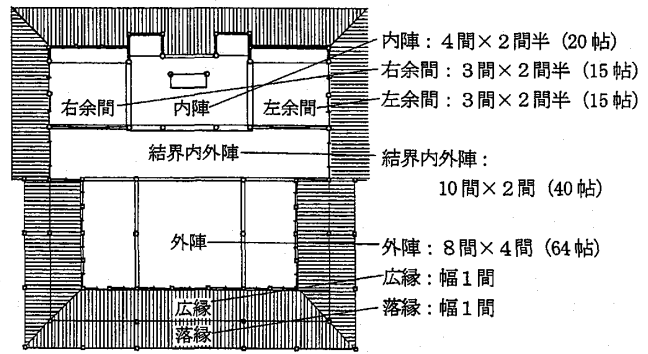


図3 備後光照寺の本堂略平面



図4 調査地区の概況

表2 調査の概要

調査地区	寺院数	木造寺院数	調査木造寺院数
福山市	41	31	24
沼隈郡	10	9	7
芦名郡	7	6	4
府中市	9	8	5
御調郡	6	6	3
深安郡	5	5	4
尾道市	11	7	6
合計	89	72	53

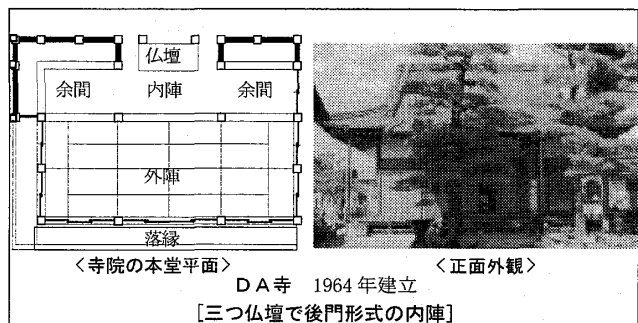
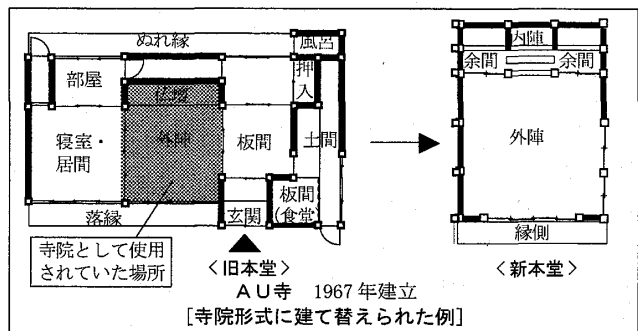
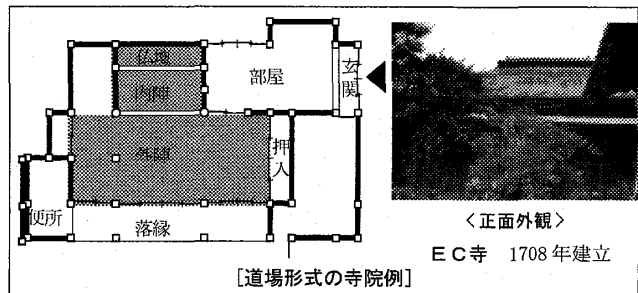


図5 本堂平面の特殊例

建立年代	1700年代		1800年代				1900年以降		合計
5 外陣間口未広さ	DB寺 1700		AP寺 1890	BB寺(天) 1897	CB寺(天) 1823	BG寺(天) 1809			5
5間	AH寺(天) 1664 AT寺(天) 1532	FB寺(佛) 1739	AC寺(天) 1800 AI寺 1810	AD寺 1870	AW寺(天) 1931 AG寺(天) 1997	ED寺 1964	AM寺 1961 AE寺(天) 1933	11	
6間	AA寺 1648 AN寺 1660頃	AB寺 1774 AS寺(佛) 1780 DD寺 1740	AQ寺 1747 CC寺(佛) 1743 DC寺 1750	CD寺(天) 1700頃 EO寺(天) 1845 BF寺(天) 1860	AX寺 1820	AR寺 1928 AF寺(天) 1933	AJ寺 1930 BA寺(天) 1994 GB寺 1937 GC寺 1920	21	
7間以上	FA寺 1600	GE寺 1725	FC寺 1781 EB寺(佛) 1713	GD寺(佛) 1895	CA寺 1987 AV寺 1922	AL寺 1921 BE寺(天) 1988	BC寺(天) 1997 EA寺 1991 GF寺 1911	13	
合計	5	13	12	20	50				

図6 調査寺院の本堂略平面

【注】本堂規模とは外陣間口寸法を指し、畳数で表示

3. 備後地方における本堂平面構成と規模

3. 1 調査寺院の本堂略平面

図6は、調査寺院の本堂略平面を、本堂規模（外陣の間口寸法とし、畳数で統一）と建立年ごとに並べたものである。その際、調査寺院が増改築されている場合には旧本堂平面の様子を聞き取って復元したものを掲げた。

図6をみると、備後地方における末寺寺院の基本的な本堂平面は、前述した3例を除くと、本堂規模の大小に関わらず、阿弥陀様が安置された須弥壇や開山床、御代床のある内陣、両脇の余間および外陣や広縁・落縁などで構成されており、概ね左右対称となっていることがわかる。これは、西本願寺の御影堂を小さくした平面構成で、図3の備後光照寺の平面的な特徴と酷似している。

調査寺院の中には、建立年が1699年以前という回答もみられたが、すべて後門形式の内陣となっている。後門形式の内陣が浄土真宗寺院に広く普及した年代を考慮す

ると、調査で得られた本堂の建立年と採取した本堂平面の実際の建立年が食い違っている可能性も考えられる。しかし、同じ後門形式でも三つ仏壇のうち真中の阿弥陀様を出仏壇とした内陣は古い建築年の場合に多く、開山床や御代床を後退させた内陣は新しい建立年の場合に多いという傾向が読み取れる。この傾向は、図7に示す内陣の改造例をみると、建て替えの際に出仏壇の内陣は開山床と御代床を後退させたタイプの内陣に変更されていることから理解できる。また、広縁の有無をみると、1900年以降に建立された寺院は、それ以前の建立年の寺院に比べ広縁をもつ例が減っていることも指摘される。

なお、図6には寺院の改宗状況も併記したが、すべて外陣をもつ浄土真宗寺院の平面的特徴がみられており、改宗の有無による本堂平面の違いは判読できなかった。また、調査寺院では外陣間口6間の本堂が最も数が多いが、本堂や内陣の規模の詳細は次項に譲ることとする。

3. 2 本堂平面の間口と奥行

浄土真宗寺院の本堂規模としては、7間四面が理想的と考えている住職が圧倒的に多い。図8は、畳数を基準とし、調査寺院の外陣間口を横軸にとり、外陣奥行と内陣奥行に、最も後退した開山床または御代床の奥行を合計したものを本堂奥行として縦軸にとったものである。

図8をみると、調査寺院50例のうち、理想とされる7間四面の本堂平面は2例と少ないことがわかる。間口と奥行が同じ寸法となっている本堂平面は全体の約1/3にとどまるが、中でも6間四面が8例と目立っている。

外陣間口としては、6間が全体の半数近くを占め最も多いが、これに5間、7間の本堂を加えると調査寺院の約8割を占めている。次に、外陣間口と本堂奥行との関係を見ると、外陣間口が6間以上の本堂では、外陣間口より本堂奥行の方が短い場合がかなり多く占めている。これに対し、外陣間口が5間以下の本堂の場合には、外陣間口と本堂奥行が同一か、または本堂奥行の方が長い場合がほとんどとなっている。これは、敷地形状の関係から本堂の間口が制約される場合でも、法要の際などに収容できる門信徒数を考慮し、本堂の奥行を深くすることで外陣の広さを確保したいという表れと理解できる。

3. 3 内陣平面の間口と奥行

本堂平面の外陣などの間口・奥行寸法は寺院によって異なっているが、内陣は仏事を行う際に必要な一定の広さが確保されているものと考えられる。そこで、外陣間口の大小を本堂規模と設定し、この本堂規模ごとに内陣間口と内陣奥行との関係を整理したのが、図9である。

図9よりみると、内陣間口は、外陣間口が5間未満の本堂でも2間半または3間となっており、5間以上の本堂になると概ね3間は確保されていることがわかる。一方、内陣奥行は6間以下の本堂では奥行が1.5間という内陣もみられるものの、全般的に内陣奥行として2間は確保されている傾向がうかがえる。このように、調査寺院における内陣の広さとしては間口3間、奥行2間という寸法構成の場合が大半を占めていることが指摘される。

そこで、内陣間口が3間の本堂を対象とし、その奥行寸法と建立年代との関係を本堂規模別に示したものが、表3である。同表をみると、本堂規模が5間または6間の場合には、本堂の建立年が新しくなるに従って内陣の奥行が深くなる傾向が読み取れる。しかし、この傾向は7間以上の本堂ではみられていないことから、7間以上の本堂では仏事に必要な奥行は一応確保されているものと推察されよう。したがって、仏事に支障の少ない内陣の奥行は最低でも2間以上は必要になると考えられる。

3. 4 内陣の平面形態とその変化

浄土真宗寺院の内陣平面は、図6の本堂略平面で示したように、後門出勤ができるように須弥壇の背面に出入口を設けた後門形式となっており、阿弥陀様を称える行

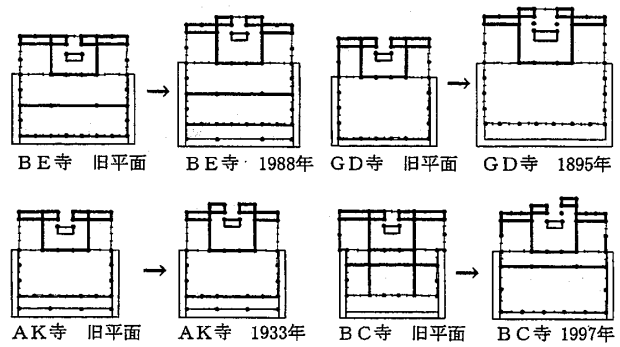


図7 本堂の建て替えに伴う内陣平面の変化例

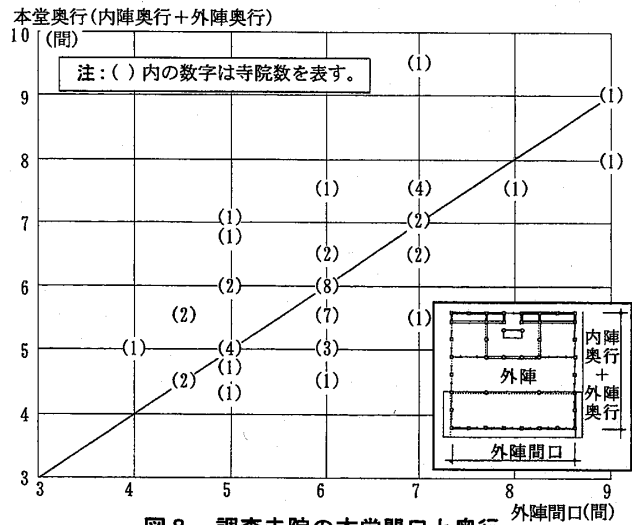


図8 調査寺院の本堂間口と奥行

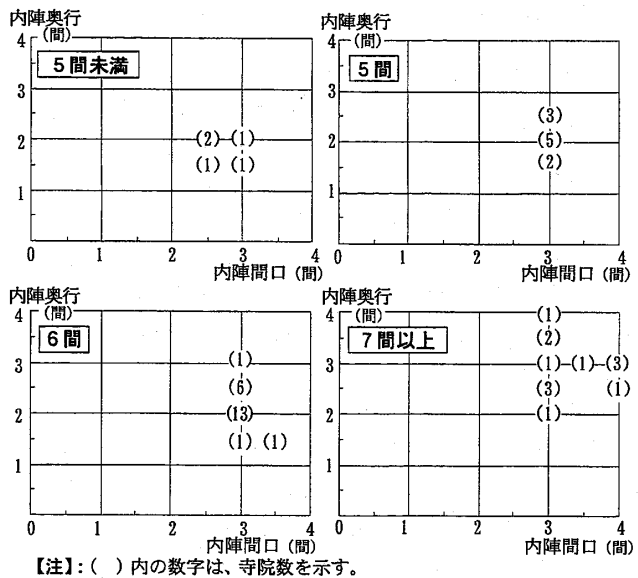


図9 本堂規模別の内陣間口と奥行

表3 間口3間の内陣における建築年代別奥行寸法

本堂規模 内陣奥行	5間				6間				7間			
	1.5間	1.75間	2.0間	2.5間	1.5間	2.0間	2.5間	3.0間	2.0間	2.5間	3.0間	
建立年代												
1699年以前			1	1			2				1	
1700年代				1	1		7					
1800年代			1	2		2	1				1	
1900年以降	1		2	2		2	4	1	2	1	1	
合計	1		2	6	2	1	13	5	1	2	2	2

道で須弥壇の回りを通行できるように構成されている。

調査寺院における内陣の平面形態を整理すると、図10に示すように、①余間の脇床と同じ並びに開山床と御代床を設け、後門出勤や行道が行えるように三つ仏壇のうち阿弥陀様を安置した須弥壇を1間前に出したタイプ、②親鸞上人の御影を安置する開山床の前に供えものなどを置く前卓や厨子を入れるスペースを確保するため、余間の脇床・内陣の御代床の並びから開山床のみを半間後退させたタイプ、③同じく脇床の並びから開山床・御代床をともに半間後退させたタイプ、④③のタイプで開山床をさらに半間後退させたタイプの4つに分類できる。

この4つの内陣平面タイプの関係としては、図7に示した本堂の建て替えによって変更された内陣平面の事例から図10に記載した矢印の方向への変化が確認できる。

表4より、本堂規模ごとに内陣の平面形態の年代的变化をみると、後退タイプの内陣は本堂規模が大きく、また建立年が新しいほど例数が増えていることがわかる。これは、内陣と余間で必要とされる奥行寸法が異なることから、開山床または御代床を後退させ、仏事に必要なスペースを広く取りたいという要望の表れといえよう。

3. 5 余間および外陣平面とその変化

内陣の左右に設けられる余間の間口寸法は、左余間は御正忌に御絵伝を4幅掛ける壁面が必要であるが、右余間は聖徳太子像しか通常は掛けないので条件が緩やかである。そこで、左余間の間口寸法を表5よりみると、建立年代に関わらず、5間本堂では1.5間、6間本堂では1.5間か2間、7間以上の本堂では2間という場合が多いことがわかる。なお、右余間は左右対称性という点から左余間と同じ間口寸法となっている場合が圧倒的に多い。また、余間の奥行寸法は、図10の内陣平面のタイプ分類で示したように、内陣の奥行との関係で決まってくる問題であるが、最近では内陣の奥行よりも浅い場合が多い。

外陣平面の奥行寸法を表6よりみると、最近では5間本堂や6間本堂は3間、7間本堂は4間の場合が多いことが読み取れる。また、外陣の間口寸法は、表7に示すように、1900年以降では最低でも5間以上は確保されている。建立年別に広縁の有無状況を図11に示したが、建立年が新しくなるほど広縁を設けない傾向がみられている。これは、本堂の増改築の際に、写真2のような外陣の周囲に設けられている広縁を外陣に取り込む例が少なくないことから理解できる。広縁をもつ寺院数の減少は、実用面を重視して少しでも外陣を広げたいという要望の反映といえる。この背景には、備後光照寺などに残っている柵（入れる場所が身分などで制限される結果）の存在が時代とともに希薄になってきたことなどがあげられる。ただし、外陣を拡張した寺院では正面から眺めた建物全体の美観的なバランスを損なう原因となり、元の本堂の姿に戻したいという声も聞かれている。

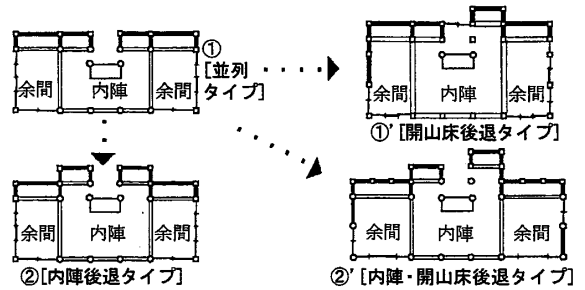


図10 内陣平面のタイプ分類

表4 建立年代と内陣平面形態

本堂規模 内陣平面 形態	5間未満		5間				6間			7間以上			
	①	②	①	①'	②	②'	①	①'	②	①	①'	②	②'
建立年代													
1699年以前			2				2						1
1700年代	1		1				6	1	1	1			1
1800年代	3	1	3				1	1	1				2
1900年以降			2	1	1	1	3	1	4	2	2	2	1
合計	4	1	8	1	1	1	12	3	6	3	2	6	2

表5 左余間の建立年代別間口寸法

本堂規模 左余間 間口	5間未満			5間			6間			7間以上			
	1.0間	1.5間	2.0間	1.0間	1.5間	2.0間	1.25間	1.5間	2.0間	1.5間	2.0間	2.25間	2.5間以上
建立年代													
1699年以前				1	1			1	1		1		
1700年代	1				1			2	6		1		2
1800年代	1	2	1		3			3		1	1		
1900年以降				1	3	1	1	3	4	1	5		1
合計	2	2	1	2	8	1	1	6	14	1	8	1	3

表6 外陣の建立年代別奥行寸法

本堂規模 外陣 奥行	5間未満		5間				6間				7間以上					
	2.5間	3間	2間	2.5間	3間	3.5間	4間	2.5間	3間	3.5間	5間	3間	3.5間	4間	4.5間	5.5間
建立年代																
1699年以前					2				2						1	
1700年代		1			1				1	6	1				2	1
1800年代	3	1	1	1	1				1	2		1	1			
1900年以降				1	3		1		7		1		2	3	2	
合計	3	2	1	5	3	1	1	2	17	1	1	1	2	7	2	1

表7 外陣の建立年代別間口寸法

外陣間口	5間未満			5間		6間		7間以上		合計
	5間未満	5間	6間	7間	以上	7間	以上	7間	以上	
建立年代										
1699年以前		2	2	1						5
1700年代	1	1	8	3						13
1800年代	4	3	3	2						12
1900年以降		5	8	8						20
合計	5	11	21	13						50

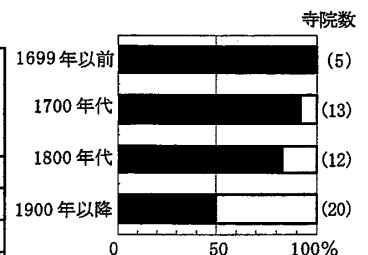
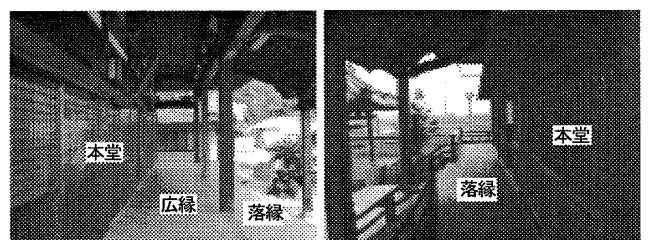


図11 建立年代と広縁の有無



[広縁と落縁]

[落縁のみ]

写真2 広縁と落縁の様子

4. 建て替え・増改築事例平面における変更内容

ここでは、本堂の建て替え事例や増改築事例における本堂平面構成の変化に注目し、現代における浄土真宗寺院の本堂平面に対する住職の考え方を探ることとする。

住職を対象としたヒアリング調査に協力が得られた45寺院のうち、捕捉できた建て替え事例は7寺院、増改築事例は12寺院である。表8に、建て替え・増改築事例のうち内陣、外陣、余間が旧本堂と比べて変更されている寺院数を示した。ただし、表8の数値には、変更場所が複数に及んでいる6寺院が重複して計上されている。

表8より、本堂平面の変更場所をみると、外陣と内陣の場合が圧倒的に多くっており、余間に及ぶ事例は少ない。特に、内陣の奥行変更が建て替えて7例中6例、増改築で12例中4例と目立っている。そこで、内陣平面と外陣平面における変更内容について詳細に検討する。

4. 1 内陣における変更内容

図12には、建て替えや増改築による内陣の変更の具体的な様子を示した。これをみると、GC寺を除く全10事例では内陣の奥行を深くしているが、さらに間口の拡幅まで行っているのはGD寺にとどまる。なお、GC寺は本堂と庫裏との間の高低差を活用し、後門出勤ができるように開山床の下に階段を設けた珍しい改造例である。

図13には、上述の内陣の奥行を深くする変更例が多い原因を探るため、変更事例の内陣の奥行寸法と平面形態との関係を示した。これをみると、内陣の奥行変更は外陣間口が6間以下よりも7間以上の寺院で多くっており、しかも変更前の奥行が2間または2間半の事例でしかみられないことがわかる。また、変更前の内陣の平面形態は、10例中9例が三つ仏壇のうち阿弥陀様を安置した須弥壇のみ前に出した出仏壇または並列タイプとなっている。しかし、この9例中1例しか変更前の平面形態が踏襲されていないことは特筆される。つまり、変更後の平面形態の内訳は、開山床後退タイプ、内陣・開山床後退タイプが各2例、内陣後退タイプが4例となっており、内陣の奥行に対する住職の強い要望がうかがえる。

図14に、内陣平面の変更が行われたにも関わらず、住職から問題が指摘されたAB寺、AV寺、GD寺の具体的な変更内容と問題点を示した。AB寺は、開山床のみを半間後退させた事例であるが、須弥壇の位置までは変更していないため、須弥壇の前が狭いことが指摘されている。AV寺およびGD寺は、内陣の奥行を深くして須弥壇の位置を半間後退させた事例であるが、開山床の前に前卓を置いているため、来迎柱と前卓の間が狭いことがあげられている。このように、内陣が狭いことから建て替え・増改築の際に旧内陣平面の奥行を少し深く変更しているが、仏具配置までは十分に検討されていなかったことが推察される。したがって、内陣の必要スペースの確保には仏具配置まで考慮する重要性が指摘される。

表8 建て替え・増改築事例における平面の変更場所

(単位: 寺院)	外陣		内陣		余間	
	間口	奥行	間口	奥行	間口	奥行
建て替え事例(7例)	2	3	1	6	2	1
増改築事例(12例)	5	3	-	4	1	1

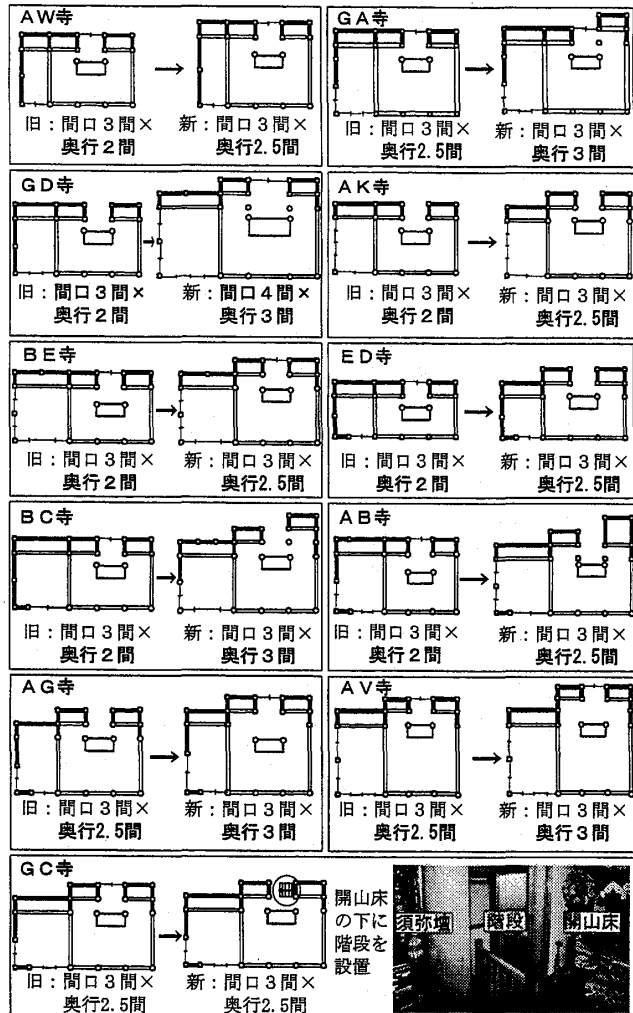


図12 建て替え・増改築事例における新旧内陣平面の比較

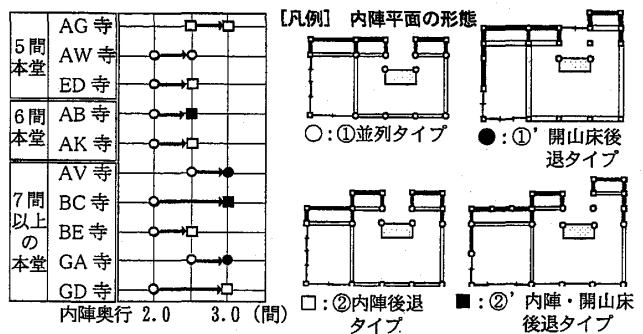


図13 内陣における奥行寸法と平面形態の変化

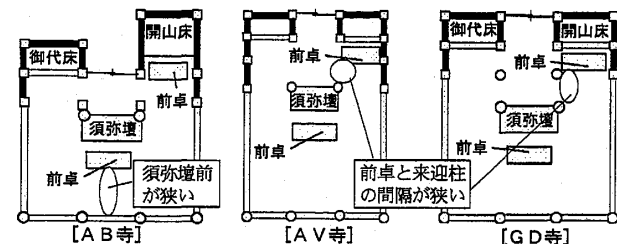


図14 内陣平面の変更後における問題箇所

4. 2 外陣における変更内容

図15に、外陣が拡張された11寺院の具体的な変更の様子を示したが、うち8例が増改築による拡張例である。

増改築事例では外陣を拡張する場合が目立つが、図15よりみると、広縁が前方のみの小さい寺院では奥行を深くし、広縁が三方にある大きい寺院では両側の広縁を取り込み、外陣間口を広げていることがわかる。ただし、ED寺は左側の落縁を外陣に取り込んで物置に改造されており、収納スペースが少ないことへの対応例である。

建て替えの際に外陣間口を拡張した事例は、GD寺、BC寺、CA寺の3カ寺であり、7間未満の本堂が7間以上に変更されている。1900年代の建立寺院では広縁のない場合が半数に及ぶことを指摘したが、建て替えの際に外陣を拡張した3例中2例では広縁を省略している。

図16は、外陣が拡張された事例の間口寸法、奥行寸法の変化を示したものである。図16の左より、外陣間口の寸法変化をみると、6例中5例は旧本堂が6間以上の場合であり、7間本堂でも間口が拡張されていることがわかる。この拡張例はGE寺とFC寺であるが、住職によると「本堂のバランス（見栄え）が悪くなったので前の7間四面に戻したい」とのことである。この事例から、本堂の外陣間口のみを単に広げればよいというものではないことが理解できる。一方、図16の右より、外陣奥行の寸法変化をみると、広縁を外陣に取り込み、外陣奥行を深くした5例は、間口を拡張した場合とは逆に、旧本堂の外陣間口がいずれも5間以下の寺院となっている。

このように、増改築事例のGE寺、FC寺、建て替え事例のGD寺を除くと、いずれも広縁が外陣に取り込まれている。これは、吹き放しの広縁の役割が徐々に失われ、外陣の広さが重視されてきたことを物語っている。

なお、余間部分のみ変更した事例はみられず、6間本堂から8間本堂に建て替えたGD寺、内陣とともに余間の奥行を深くしたAG寺やAW寺、外陣間口の拡張に伴い余間の間口を広げたCA寺やGE寺というように、内陣や外陣の拡張により余間も拡張されたものと考えられる。また、余間では変更後の問題点も聞かれていない。

上述のように、本堂の建て替え、または増改築の際に行われる本堂平面の変更内容としては、主に内陣平面の奥行を深くする工夫、外陣平面の拡張が中心となっていることが理解できる。したがって、住職が本堂平面に対して使用上の実用面・機能面を重視した考え方に基づいて本堂平面の変更が行われていると解釈される。その一方で、内陣平面では仏具配置までの配慮不足から変更が十分に生かされていない事例、外陣の拡張や広縁の省略が本堂全体の美観上のバランスを壊している事例があることなどの問題も把握できた。したがって、内陣平面において、仏具配置などを考慮した使用上の問題が少ない空き寸法についても検討する必要があると考えられる。

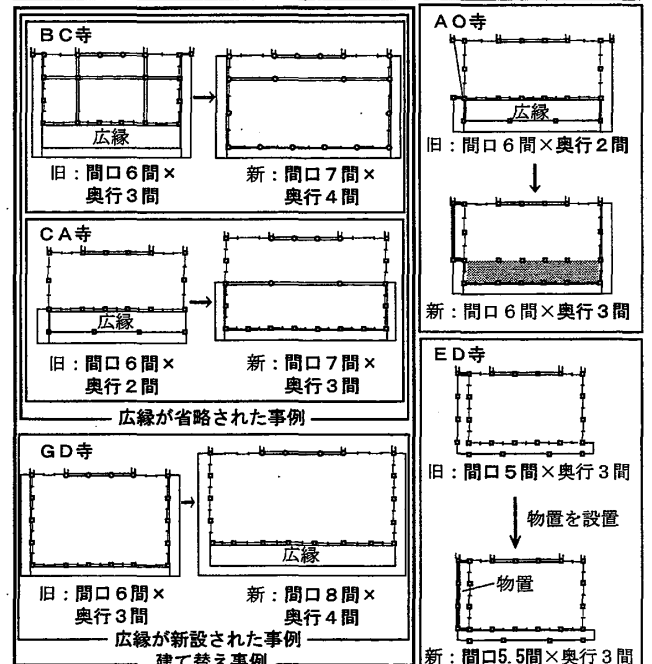
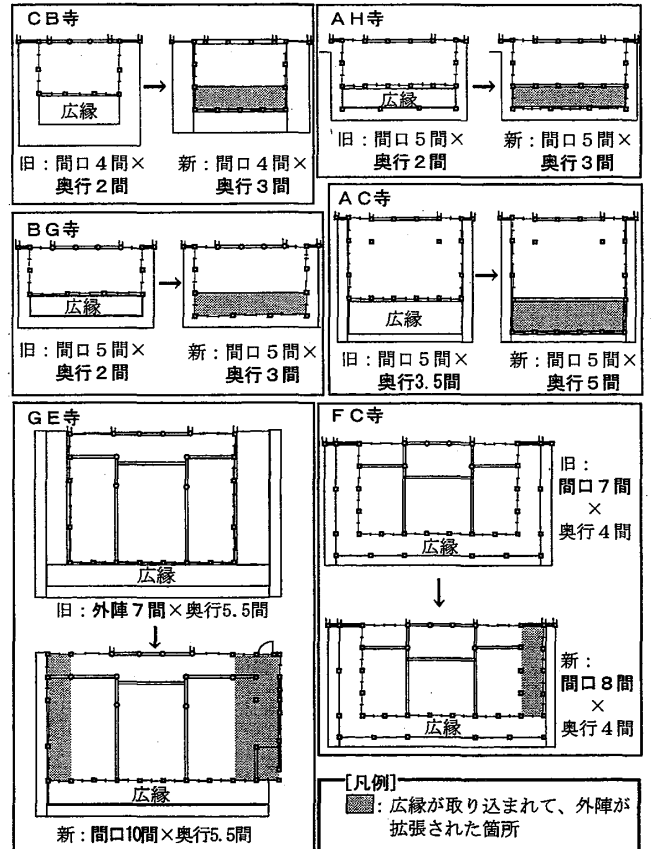


図15 建て替え・増改築事例における新旧外陣平面の対比

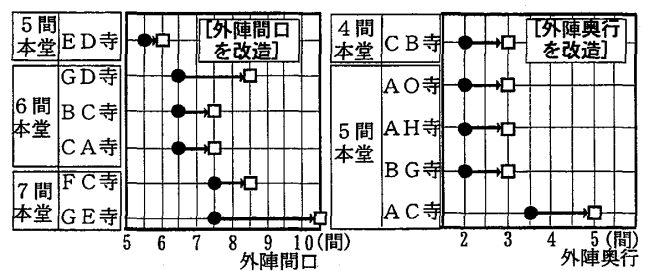


図16 外陣の間口・奥行の寸法変化

5. 平面構成要素に対する住職の要望

5. 1 内陣に対する要望

図17には、内陣を拡張したいという要望があった寺院の様子を例数で表示した。住職の要望はすべて内陣の奥行をさらに深くしたいというもので、内陣の間口に対する要望は聞かれていない。同図をみると、6間以下の本堂では内陣の奥行が2間以下の場合に、同じく7間以上の本堂では2間半以上の場合に奥行を深くしたいという要望があり、本堂規模の大小により事情が違うことがうかがえる。前述した内陣の変更例の奥行寸法より勘案すると、奥行は最低でも2間半以上は必要であることが推察される。しかし、図17の右に、奥行を深くしたいという寺院のうち、数値が提示された事例の現状寸法と要望寸法を示したが、本堂の規模が大きくても内陣の奥行をさらに確保したいという要望があることが読み取れる。

内陣は、図14で示したように、単に広さだけではその良否を判断することができないので、住職を対象に図18の凡例に示した3カ所の寸法に対する問題の所在について調査した。すなわち、①仏事の際に僧衣で来迎柱の金箔を擦ったり、前卓を置くと開山床の前が狭いことから問題となる来迎柱と開山床の有効幅(a寸法)、②来迎柱から余間側の内陣端までの有効寸法(b寸法)、③須弥壇から内陣の手前までの有効寸法から前卓の奥行寸法を除いた寸法(c寸法)である。これらの寸法に対する住職の評価を整理したものが、図18である。これを見ると、a寸法では約800mm、b寸法では2,000mm、c寸法では1,800mmを超えると問題の指摘がなくなっていることから、この程度の寸法の確保が必要であると判断される。

5. 2 外陣に対する要望

図19は、住職の外陣を見直したいという意見と現本堂でよいという意見に分け、現在の外陣の間口寸法と奥行寸法との関係を示したものである。同図の左より、外陣を見直したい場合をみると、外陣間口6間以下では奥行3間以下の寺院で多く指摘されており、逆に外陣間口8間以上でも5例中4例が見直したいと答えている。これに対し、現本堂でよい場合を図19の右よりみると、外陣間口6間では奥行3間以上の寺院がほとんどを占め、外陣間口7間では奥行4間以上の寺院が多くなっている。

図20は、外陣を見直したいという寺院のうち、具体的に改善したい数値が得られた事例を抽出し、現在の間口寸法または奥行寸法と要望寸法との関係を示したものである。同図の左より外陣間口の場合をみると、6間以下の本堂では外陣間口を広く、8間以上の本堂では外陣間口を狭くしたいと回答しており、8例中6例が間口を7間にしたいと要望していることが特筆できる。次に、外陣奥行の場合を図20の右よりみると、8例中7例は奥行を深くしたいと答えており、特に8例中5例は4間の奥行をもつ外陣にしたいという要望があることがわかる。

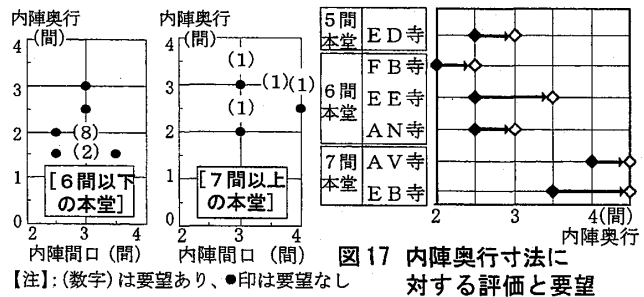


図17 内陣奥行寸法に対する評価と要望

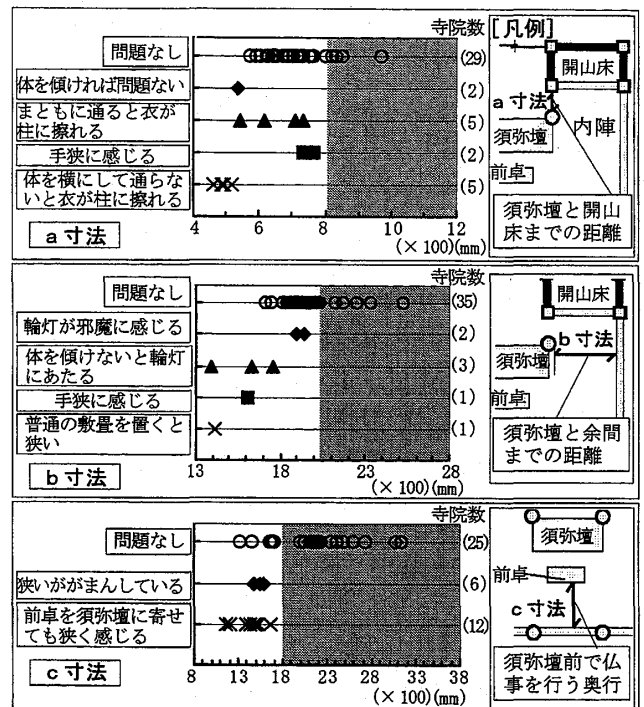


図18 内陣の現状寸法に対する評価

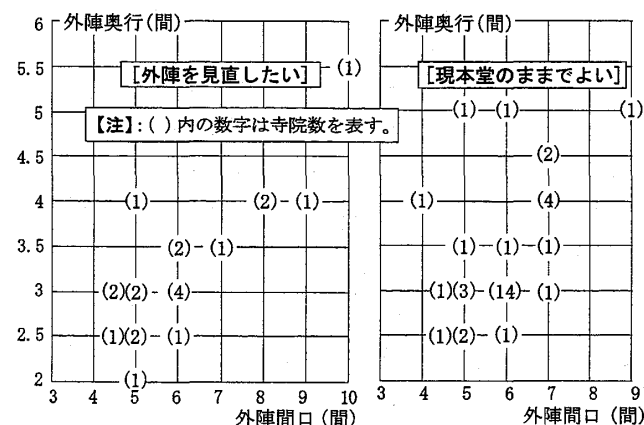


図19 外陣の現状寸法に対する評価

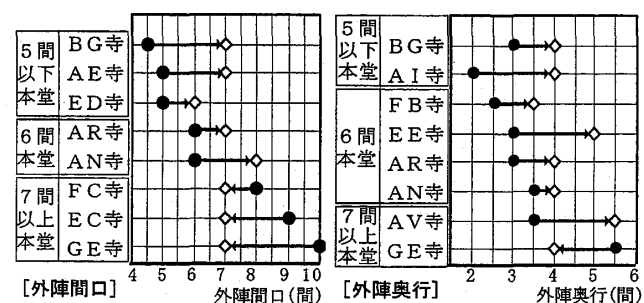


図20 外陣の間口・奥行寸法に対する要望

このように外陣の広さへの要望として、間口7間、奥行4間という回答が多いことがわかる。これは、多くの住職が「真宗末寺本堂は7間四面が望ましい」と考えていることによる影響と思われる。なお、外陣を狭くしたいと答えたFC寺、GE寺は、前述したように、広縁を取り込んで本堂の美観が損なわれたという事例である。

5. 3 余間に対する要望

住職に対するヒアリング調査では、余間に関する問題点の指摘や要望などは聞かれず、余間の広さは内陣や外陣に合わせたもので十分という回答にとどまっている。

左余間では、御正忌の際に御絵伝を4幅掛けることから2間は必要とされている。しかし、写真3、図21のように、脇床の袖壁にまで掛け軸を掛けている例や幅の短い軸を掛けている例がみられ、実際には1間半でも対応されている。ただし、左余間の間口が1間の4寺院では御絵伝を掛けないという回答であったことから、御絵伝を掛ける場合には左余間は最低でも1間半の間口が必要であるが、2間は確保することが望ましいといえよう。

右余間には太子御影像が1幅掛けられ、左余間ほど間口寸法の要求はみられないが、平面の左右対称性からほぼ同じ間口寸法となっている。なお、余間の間口は5間本堂では1.5間、6間・7間本堂では2間となっている場合が多く、また余間の奥行としては2間の場合が多い。

余間の使われ方としては、収納場所が十分でない本堂では、写真4のように、余間が物置場となっている例が少なくない。余間に物が置かれていない寺院は、捕捉できた50例のうち5例にとどまっている。余間に置かれている物を整理したのが、図22である。これを見ると、仏具は右余間で約5割、左余間で約6割となっているが、そのほか放送設備が約3割、収納タンスが約2割も置かれていることがわかる。特に放送設備は15例中14例が右余間に置かれているが、これは庫裏が本堂の右側にある場合が約7割と多いことを考え合わせると理解できる。なお、物が置かれている余間の場所としては、図22に示すように、外陣から直接見えない襖の裏となっている。

6. 内陣・外陣平面の要点と本堂の現代的な課題

6. 1 内陣・外陣平面の要点

図23に、5寺院の住職が浄土真宗末寺の理想的な本堂イメージとして回答した7間四面本堂の略図を示した。住職の描く末寺本堂の平面構成としては、内陣は間口3間・奥行2.5間、外陣は間口7間・奥行4間、余間が間口2間・奥行2.5間となっている。これに対して、寸法的な配慮が特に必要な内陣、外陣・余間について、本分析で得られた基本的な寸法と平面構成を図24に整理した。

内陣の平面形態としては、図24の上より、開山床前に前卓②を置くのか上卓にするのかで異なり、前卓②を置く場合には開山床の懐を深くするか、内陣全体を深くす



写真3 5幅掛けられた間口1間半の余間例

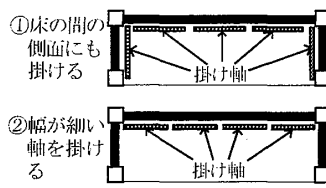


図21 1間半の余間における掛け軸を掛ける方法



写真4 物置化している余間例

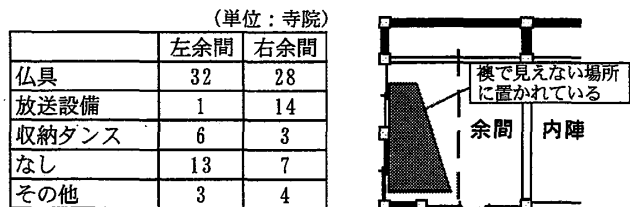


図22 余間における物の置かれ方

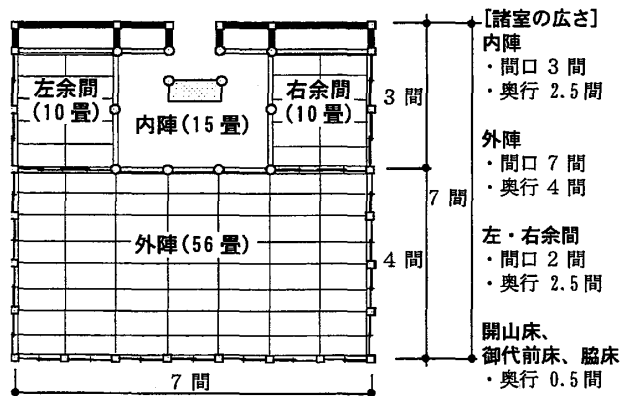


図23 理想とされる7間四面の本堂例

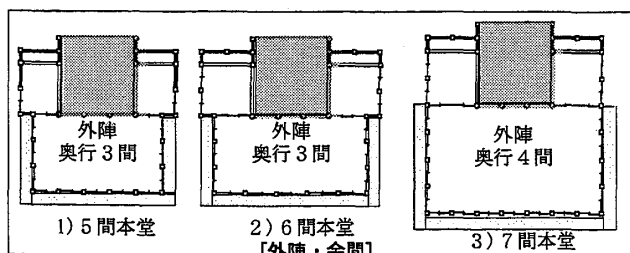
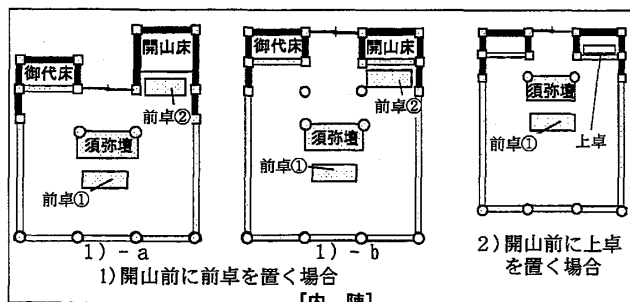


図24 問題の指摘が少ない本堂平面例

る必要がある。また、須弥壇と前卓①との間にも人が通れるように 700mm 程度の空きが必要となる。内陣の奥行としては、図 18 の結果も考慮すると 3,300mm+須弥壇+前卓①、または 3,300mm+須弥壇+前卓①+前卓②とした寸法の方が問題の少ないものといえる。なお、内陣の間口としては、3間以上は確保した方が問題は少ない。

外陣・余間としては、外陣間口6間以下の本堂で外陣奥行が3間以上、同じく7間以上で4間以上とし、余間の間口寸法は 1.5間以上が問題の少ない平面といえる。

6. 2 本堂における現代的な課題

表 9 は、住職へのヒアリング調査で得られた内陣・外陣以外の本堂全般に対する要望を整理したものである。

表 9 より、本堂の構造に関する要望は 25 寺院で聞かれたが、RC造にしたいという寺院は 1 例にとどまり、残りの 24 寺院は現在と同じ木造という結果となっている。

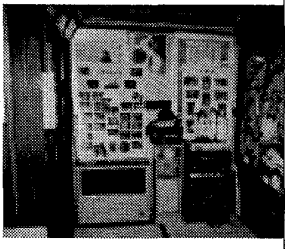
本堂の外観デザインに関しては、最近では設置されなくなってきた広縁を設けたい、庫裏を本堂の後ろに建てたい、屋根を入母屋平入りから入母屋妻入りにしたいという指摘がみられている。また、外陣や余間に置かれた放送設備や配線などの美観上の対策のほか、内陣などに置かれた仏具や外陣に置かれたイスなどの収納スペース不足も指摘されているが、これも美観上の問題といえる。

門信徒の高齢化に起因してバリアフリー対応に関する声も少なくなく、参拝する際に段差が多いことから段差解消の問題などが指摘されている。しかし、向拝から外陣に上がる階段をスロープ化しなくても、スロープに必要なスペースの問題だけでなく、美観上の問題とも関わってくる。例えば、実際にスロープを設けようとする、写真 5 の左に例示したように、スロープを向拝正面ではなく、外陣隅の落縁にせざるを得ないことになる。また、膝や足に障害がある人などへの対応として、最近では、写真 5 の右に示すように、外陣にイスを設置している寺院が増えてきている。調査寺院のうち、実際に約 6 割の寺院で外陣にイスが設置されており、中にはイスの設置に応じて板間にしたいという要望も聞かれている。

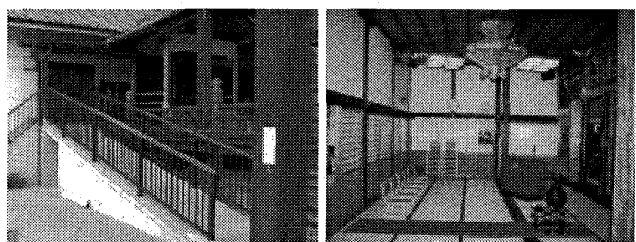
この種のバリアフリー化への対応は、本堂平面構成もさることながら外陣の床高、外陣と内陣の床高差などにも影響を与え、引いては本堂の外観デザイン上の問題となってくると考えられる。例えば、前者では、外陣のイス座化に伴って視点が高くなることから、説法の際に講師と目が合うことや御本尊の見え方などの問題が聞かれており、須弥壇などの高さに対する配慮が必要となってくる。また後者では、外陣の床高を従来よりも低く押さえると、それに伴って広縁や落縁の高さを低くすることになり、向拝正面などからみた美観を損なってしまう。

このほかの要望としては、法中部屋・講師部屋・収納スペースなどの整備、門信徒などが気軽に使用できる門徒会館の整備なども今後の課題としてあげられている。

表 9 本堂全般に対する住職の要望

<p>構造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木造にしたい。(24) ・RC造にしたい。(1)
<p>本堂の美観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本堂の見映えをよくしたいため、本堂の後ろに庫裏を建てたい。(1) ・本堂の美観上、前方に広縁をつけたい。(1) ・本堂の美観上、本堂前方・両側の三方に広縁を付けたい。(1) ・本堂の奥行きを深くしたいが、入母屋平入では見映えがよくないので、屋根は入母屋妻入としたい。(2) ・本堂を正しい形式にしたいので、後廊下をつけたい。(1)
<p>収納</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イスを収める収納スペースが外陣の近くに欲しい。(2) ・本堂近くに仏具を収める倉庫が欲しい。(3) ・本堂に収納スペースが欲しい。(2)
<p>設備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外陣にあるアンプを見えないように設置したい。(1) ・本堂にある配線を見えないようにしたい。(2) ・外陣に最も効果的に響くスピーカーの配置を知りたい。(1) ・余間に放送設備を置いているが、余り見映えがよくないので放送設備専用の部屋が欲しい。(1) 
<p>バリアフリー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本堂をバリアフリーにしたい。(3) ・本堂へ入る道の段差をなくしたい。(1) ・本堂に車イス対応の便所を設置したい。(1) ・本堂を車イス対応にしたい。(3) ・本堂の美観を損なわないバリアフリーの案が欲しい。(1) ・本堂へと上がる所をスロープにしたい。ただし、スロープに必要なスペースの確保や美観上の問題で悩む。(1)
<p>イス座対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イス座ができるように外陣奥行1間分は板間にしたい。(1) ・イス座ができるように外陣奥行1.5間分は板間にしたい。(1) ・イス座ができるように外陣を全てを板間にしたい。(2) ・イス座ができるように一部を板間にして、さらに正座と同視点になるように段差をつけた。(1) ・具体案はないが、イス座対応にしたい。(5)
<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山門から本堂まで舗装していないのため靴が汚れてしまうので石畳を敷きたい。(1) ・湿気対策として、本堂を山から離したい。(1) ・後廊下を大きくして、法中さんの控えのスペースを確保したい。(1) ・法中部屋・講師部屋・収納が本堂の近くに欲しいので後堂を付けたい。(1) ・本堂や庫裏では、門徒や地域住民が遠慮して入ってこないようになったので、気軽に入れる施設が欲しい。(2)

【注】：表中の()内の数字は寺院数を表す。



【スロープ化】

【イス座】

写真 5 高齢化対応の様子

7. 考 察

以上のように、門信徒に供する外陣をもつ浄土真宗寺院に注目し、本堂が現在のような平面構成となる歴史的経緯および備後地方の末寺の本堂規模や平面構成について検討してきた。その結果、浄土真宗末寺では、(1) 村落の惣道場や内道場が刀狩令を契機に寺号を取得して寺院化が始まり、本山から下附された宗祖御影、七高僧・太子御影などを安置する内陣や余間などが整備されていること、(2) 諸寺院法度、堂舎客殿作事之定などによって寺院の本末関係が明確にされ、本山の許可を受けて須弥壇、厨子・客殿、向拝などが取り入れられ、現在のような本堂平面が形成されてきたことなどが理解できた。また、備後地方における浄土真宗末寺の本堂平面としては、(3) 概ね左右対称を保ち、後門形式の内陣と両脇の余間、外陣や広縁・落縁などで構成されていること、(4) 外陣間口6間の本堂が最も多くみられ、奥行との関係によって外陣の広さを確保し、1900年代以降の建立寺院になると広縁も外陣に取り込まれがちであること、(5) 内陣平面は間口3間・奥行2間以上が大半であり、内陣平面の奥行を確保するため後門形式も開山床や御代床を後退させたタイプに移行していることなどが把握できた。

次いで、備後地方における浄土真宗末寺の建て替え事例や増改築事例から本堂平面の基本的な考え方などを抽出し、住職の内陣・外陣・余間に対する要望について把握した結果、次のようなことがわかった。(1) 建て替え・増改築の際に内陣の奥行を拡張し、広縁を取り込むなど外陣を拡張する傾向が強いこと、(2) 浄土真宗末寺において住職が理想的と考えている本堂は、内陣は間口3間・奥行2.5間、外陣は間口7間・奥行4間、余間が間口2間・奥行2.5間の平面構成であること、などである。

また、建て替えや増改築で変更が目立った内陣平面における住職による寸法評価を行うとともに、内陣・外陣平面の構成要素と寸法についても考究し、(3) 住職による使用上の指摘から問題の少ない内陣平面の空き寸法、および外陣の間口と奥行の寸法関係、余間の間口寸法として、次の平面計画上の要点を提示することができた。

すなわち、①開山床前に前卓を置くか否かによって内陣の平面形態が相違してくること、②住職の寸法評価より、須弥壇と開山床の間は800mm、須弥壇と余間までの間は2,000mm、須弥壇前の前卓から1,800mmをそれぞれ確保することが仏事の際に問題が少ないこと、③内陣の間口は3間以上として、内陣の奥行を開山床と須弥壇の間を800mm、須弥壇と前卓の間を700mm、前卓前の空きを1,800mm(以上計3,300mm)とし、これに須弥壇や前卓の奥行を加算(開山床前に前卓を置く場合にはその奥行も追加)した寸法の確保が望ましいこと、④外陣間口6間以下の本堂では外陣奥行が3間以上、同じく7間以上では4間以上とする方が問題の少ないこと、などである。

さらに、住職の本堂全般に対する要望から、本堂の外観デザイン上のバランス、設備機器や配線による美観上の問題点、収納スペースの確保、門信徒の高齢化に対応した配慮など本堂に関する現代的な課題が抽出できた。

このように、浄土真宗末寺の本堂は、江戸時代に徐々に醸成されてきた内陣や外陣などの平面構成要素による基本形を踏襲しながら今日まで受け継がれているといえる。その一方、現代社会の時代的な変化や要請を受けながら本堂平面が改善されているが、高齢化対応の問題や設備機器の導入による美観上の問題など新たな課題も付加されている。そういう意味で、寺院建築も伝統的要素に実用性をもたせる工夫が求められているといえよう。

なお、末寺寺院の場合には、上述したような伝統的な本堂形式の継承問題もさることながら、仏事などの際に庫裏の多くの部屋が使用されることから、住職の家族のプライバシーが保ちにくいという問題が指摘される。つまり、末寺本堂の平面構成や配置を考える場合には、寺院の運営に当たる住職家族の庫裏部分との関係をどのように調整するかが、大きな計画的課題として浮上してくる。プライバシーの確保の点からは、この庫裏部分と本堂部分の機能分化を考えざるをえないが、実際にはかなり困難な問題を含んでいる。それは、機能分化を進めるには、法中部屋・講師部屋などの諸室を庫裏部分から分離し、また門信徒が専用で使用できる厨房や会席室などを整備することが必須の条件となってくるからである。

終わりに、本調査に理解と協力を頂いた住職さんをはじめとした寺院関係者の方々、並びに本調査研究に協力を頂いた福山大学学部卒業生森川綾香(平成10年度)さん、福田純也(平成11年度)君に深謝の意を表したい。

参考文献

- 文-1: 櫻井敏雄:「浄土真宗寺院の建築史的研究」、法政大学出版、1997年
- 文-2: 光照寺史編集委員会:「備後光照寺」、福山光照寺、1998年
- 文-3: 三宮義信:「真宗史」、本願寺出版社、1982年
- 文-4: 中尾亮:「日本人の仏教9:寺院の歴史と伝統」、東京出版、1983年
- 文-5: 井上鋭夫:「本願寺」、至文堂、1964年寺
- 文-6: 藤原義一:「浄土真宗の寺院建築」、雄山閣、1930年代
- 文-7: 浄土真宗本願寺派東京教区青年僧侶協議会:「浄土真宗のおつとめと心得」、池田書院、1998年
- 文-8: 太田博太郎:「日本建築様式史」、美術出版社、1999年
- 文-9: 佐藤日出男:「社寺建築の工法」、理工学社、1983年
- 文-10: 無漏田芳信、小村治、吉川博司:浄土真宗寺院本堂の新旧平面比較と改善要望について、日本建築学会・地域施設計画研究18、pp303-308、2000年7月
- 文-11: 無漏田芳信、小村治、吉川博司:浄土真宗寺院の本堂の形成過程と備後末寺の平面特性について、日本建築学会・地域施設計画研究18、pp303-308、2000年7月